



会長 屋山太郎

移民による文化摩擦と国家の崩壊

世界は柔らかな人口混成を経て、どの民族も幸せな生活環境を作ろうとしているようだが、今のやり方では幸せな社会はできない。優しい文化や心地よい習慣も生まれない。荒っぽく廃れた社会に行きつくしかない。EUが試みたような集団で移行するのを自由にすることは、いかにも移動の自由を尊重した考え方に見えるが、迎える側にとっては大きな文化摩擦が生まれる。英国がEUを離脱したのはその苦しみからの脱却ではないのか。

1810～1900年の間に、3,000万人の欧州人が米国に移住した。17世紀には40万人の英国人が米国に移住した。2017年には780万人が故郷を追われたと言われているが、その受入先の内訳はトルコが350万人、ウガンダとパキスタンが合わせて140万人、レバノンが99万8,900人、イラン97万9,400人となる。かくも多くの移民が地球を駆け巡っているのか。目下は食糧難だが、スウェーデンのように、異国民は必ず助けなければならないと崇高な精神を掲げる国民がいてもいい。しかしその精神が貫かれる限り、困窮する国や政権が出てくることは仕方ない。

どうやら移民の強要が、既成の国家を倒すほどの重荷になっているのではないか。

私は1960年代から10年程ヨーロッパ生活を経験した。中国人の少年が、朝、顔が合うとボンジュール（おはようございます）と挨拶したものである。社会の習慣に従おうとする気風を持っていたと言おうか。それが最近では中国人ばかりがまとまっ

て住む習慣に変わってきた。フランスのパリでは、住む住民が区ごとに異なる。おまけに話す言葉も違う。「フランスがフランスでなくなるのが怖い」とフランス人が言う。フランスの文化を移民達にぶち壊されてはたまらない。これは崇高な人種平等とか異民族の尊重といった理想で補えるものではない。

移民尊重の考え方をこの辺で改めておかないと文化崩壊となるのは必至だ。日本も少子化を移民受け入れで若干、補うつもりのようなのだが、員数だけ補う考え方だと日本文化の崩壊につながる。まず、朝会えば「おはよう」という少年を育て上げ、日本の作法を守れない者は「国外退去」の罰を加えれば良いのである。犯罪者が何百人も日本に留まることを許してはならない。あの国で泥棒をすれば国外追放だと自覚させることが大切だ。

私の経験では、アフリカにはアフリカの考え方がある。困るのはアラブである。そこに白人が入り込み、「支配」した間は落ち着いていた。多分、西洋式の秩序で落ち着かされていたのだろうが、西側が軍事力を引き上げたばかりに混沌とした。ホメイニ革命やらイラ・イラ戦争などアラブの戦争を取材したことがあるが、彼等の戦争や紛争の理由や力の手法は全く分からない。解決は彼等の知識に任せるしかない。

宗教は理屈ではない。ヘジャブを強要する社会と折り合いをつける方法は、今のところない。米国がその意志を無くしたのは、結構なことだ。